踏　み　跡　＜ My mountains ＞

南アルプス	塩見岳から茶臼岳まで縦走	No.050

話が出始めたのが昭和39年の夏か秋だった。年末にはもう三伏峠から入山することまで決まっていた。
光岳（てかりだけ）を最終ゴールとしたが、天候の問題もあるし行ける所までということで合意した。我々にとっては珍しい長期的な計画である。メンバーは前回・前々回に記したように恩田・井口・小林。天幕を使用した3人での縦走で、期間は8日間、ひとつの冒険に近い。我々、特に私と井口にとって、これは未体験分野である。
さらに、塩見岳の3046.9mをはじめとして荒川岳（中岳3083.2m　東岳3146m）、赤石岳3120.1m、聖岳3011mと3000m峰が毎日続くという点でも、これまた未知の世界である。
南アルプスはよく南部と北部に分けて呼ぶことがあるが、南部と北部の境界はどこかというと・・・・・
南アルプスは、富士川と天竜川にはさまれた、すなわちこれらふたつの川が発する山地である。この山地の中央部、三峰岳あたりからもうひとつの大河大井川が流れを発する。この流れにより、南アルプス南部の山並みは二つに割れるのだが、東の富士川側はすでに中流になっているため、山はさほど大きくない。一方、西の天竜川側はますます元気な流れに加え、生まれたばかりの大井川がこれをはさみ、赤石山脈の主軸をなす稜線を作っている。この大井川の発する三峰岳より南側を南アルプス南部というのが通念らしい。つまり、正式に言うと今回の旅は「南アルプス南部縦走」ということになる。

国立公園になったとはいえ相変わらず秘境であると言う点ではちっとも変わってはいない。シーズン中に賑わいを見せるのは、わずかに北部の甲斐駒・鳳凰を中心とした付近だけである。
ガイドブック三冊、山と渓谷、岳人、地図、これらの資料を毎日机の周りに散乱させながら下調べをした日数はどのぐらいになるだろうか。食料も装備も深く考察しなければならない。
準備が進むうちに、遊びに行くというより「生活の場を移す」と考えなければならないと感じるようになった。

昭和40年7月30日
新宿駅21時30分、待ち合せのホームは満員。荷物の重さにまだ馴れていないため、階段の上り下りがしんどい。軽量し忘れたが、40Kg近くあったかもしれない。暑くて、もう短パンスタイル。
23時発の急行第二白馬、勿論座れっこない。通路にキスリングを置き、手すりやキスリングの上の腰掛け、辛うじて立つことは避けられたが、あまり楽ではない。これでは一睡もできよう筈がない。スタートから不運である。混雑は覚悟していたが、それでも座席が確保できなかった悔しさ、座っている奴がうらめしくさえ思う。まあ、明日は三

伏峠までだからいいだろう。
新宿・立川・八王子・高尾・相模湖・藤野・上野原・・・・岡谷・川岸・辰野、ここで飯田線に乗り換えて、宮木、伊那新町、羽場・沢・・・・伊那田島、上片桐、伊那大島。
いやあ、先が長い、時刻表を見ただけでいやになってしまう。蒸し暑い電車に乗せられて・・・、よくこんな電車に乗って出かけたがる馬鹿がいるものだ、おかげで俺達は明日は眠いだろうな。明日居眠りをしながら歩いている自分の姿を思い浮かべただけでも、不幸な星の下に生まれたことを嘆かざるをえない。

昭和40年7月31日（快晴）
「たつの～たつの～、いいだせんのりかえ、たつのです」
隣の飯田線ホームへ駆け足。これがまた乗れたもんじゃない。発車のベルは鳴り響いているのに、特大のキスリングで埋められた扉口は葡萄の房のような人の群れ。隣の扉、隣の扉と乗れる扉を捜し歩くうちに、中央部のクハの車両の運転席で扉が半開きになっているところを見つけた。発車のベルは鳴り終わった、急げ。キスリング三個を放り込み、運転席に入り扉を閉めたら電車は走り出した。
運転席に積み上げられた二尺のキスリングの上に腰を下ろしてホッとした瞬間、睡魔が襲ってきた。
伊那北で殆んどの客が降りてしまい、車内は静かになった。駒ヶ根が近くなるにつれて中央アルプスの山並みが朝空に現れ始めたが、瞼にはもはやそれを見つめる余裕はない。伊那谷を小刻みに揺れて走る電車を子守唄にいつしか・・・・。
伊那大島6時22分着、陽差し強く寝不足の目には厳しすぎる。バスを待つ人の多数は縦走らしいが、聞いてみると赤石岳あたりまでの人がほとんどで、我々のように聖岳以南を目指そうというパーティは少なそうだった。
何台かバスを待ち、7時05分にようやく出発。やっと座れた！　身も世も知らず昏々と熟睡してしまい、あたりの景色のことはひとことも語れない。時々頭をゴツンとぶつけて目覚ましになったが、痛いとなど思わない。
塩川9時05分着、バスを降りたら、窓側だった左側頭部が凸凹になっていた。少しは頭が良くなったかも。
塩川の流れを聞きながら朝食をとり、ラジオ体操で体をほぐし、いよいよ第一日目の出発。
重いキスリングを背負って長丁場を歩くので、まずはペース作りとして「30分歩いたら5分休み」としてみた。
2580mの三伏峠への標高差1000mの登りは、睡眠不足の体には少々気の毒である。列車の中で既に疲れている肉体に急登と重い荷は痛くこたえる。少し慣れてきたところで「ワンピッチ一時間」としてみたが、いつの間にか30分になってしまいしかも小休止もいつしか5分になってしまった。正直言って、いやいや登ったという感じしか心に残っていない。
三伏峠16時。塩川を出てから6間余、三伏峠の小屋の姿が見えた時には、思わず知らず体中から力が抜けるのを感じた。峠から三伏沢のテントサイトまでの30分、これほど長いと思ったインターバルはなかった。あと何分、あと何分と時計を見ながら顔をしかめての歩きで、あたりの景色なんか問題ではない。早く眠りたい、ただそれだけ。
奮闘の疲れは夕食の豚汁で吹き飛んでしまった。19時30分就寝、寝不足も手伝ってか、シュラフに入ったらすぐ眠ってしまったようだ。

昭和40年8月1日（快晴）
今日から8月だ。起床4時半、早いパーティはすでに出発している。特に荒川岳へ向かうパーティはもう大部分が出てしまったようだ。朝食はカレー汁にふりかけとご飯。今日の予定はサブザックで塩見岳のピストン。昨日の荷物を思うとまるで遠足気分である。
6時半出発、今日もいい天気のようだ。本谷山付近からの塩見岳はなかなか素晴らしい。大井川源流の中俣を挟んで、北俣尾根と徳右衛門岳を右に引き連れ、今出たばかりの太陽にシルエットを描いている。
黒い塊のような塩見も権右衛門山あたりまで来ると岩のひとつひとつの隆起まで見せ始め、やがてそれも我々の靴の下で快い音を立てるようになってくる。三伏沢2時間40分、第一番目の3000m峰　塩見岳（3046.9m）。
北に北荒川岳から三峰岳への牛の背のような稜線、その稜線の行く手　右に間ノ岳、農鳥岳　左に仙丈ケ岳。緑のハイマツのカーペットと黄土色の岩屑を敷き詰めたような稜線、紺碧の空。これらの組み合わせが織り成す風景は絵にも書けないほどの美しさである。塩見岳の南東になだらかな馬の背のような尾根を引いて蝙蝠岳と徳

右衛門岳がある。忘れられた存在ではあるが、蝙蝠岳は2864.7m　徳右衛門岳は2598.5m。尾根の東側は大井川東俣、西側は西俣。今日逃せば今後登るチャンスがあるかどうかわからない。思い切って蝙蝠岳だけピストンすることにする。10時出発。井口は塩見岳で待機。

ハイマツの幅広い尾根を下っていくと、塩見岳が今朝見たのとはまったく違う形を見せてくれる。しばらく下った後はさしたる起伏もなく快適に歩くことができる。（左写真：蝙蝠岳からの塩見）小西俣の谷に雲が出始めたが荒川岳の三つのピークは不動の貫禄で立ちはだかっている。誰もいない蝙蝠岳を後に塩見岳へ戻る頃からじわじわと疲れが出てきた。しかし、ハイマツを撫でる風が気持ちよい。行きも帰りもなだらかな稜線の空身の旅なので、小走りに駆け抜け、13時25分塩見岳に戻ることができた。

午後になってもまだ四方の眺めは変わらない。特に白根三山と荒川岳の大きさがよくわかる。予想以上の好天に驚いてしまう。多少頭痛を感じるのは高山病に近い症状だろうか。酸素量も 2/3 に減っているのだから当たり前と言う気もする。本谷山あたりまで来ると「バテ」を感じてきた。蝙蝠岳の往復で飛ばしたのがこたえてきた。恩田の顔も苦しそうだ。のどの渇き、倦怠感、水はもうないのに苦しい日差し。突然足元に見つけた水溜りに思わず唇を突っ込んだ。唇に付いた赤土がいかにも惨めな感じだった。後で聞くと、後ろから来る井口も一滴の水を求めてここで口付けをしたと言う。

縦走第一日目の3000mはやはり苦しい経験だった。テントサイトに16時20分帰着。すぐに沢の流れに口をつけてたっぷりと給水し、生き返った心地になったが、恩田が本当にバテてしまって動かない。嘔吐、無食欲、倦怠感、内臓まで疲れ果ててしまったようで、寝込んでしまった。

夕食は二人分だけ作り、井口とさびしく食事。恩田曰く、

「一晩で回復するかどうかは微妙、過去の経験から見て多分駄目だろう。この先は二人で縦走してくれ」

何度も一緒に歩いている私には恩田の体調は大体理解できた。リーダーの恩田が明日下山することで合意したが、二人だと荷物は重くなるし不安材料は沢山ある。とにかくできるところまで頑張ることにしようということにして寝袋に入った。井口と私は夕食をとったことで今日の疲労困憊は回復できたが、先のことを思い浮かべるとなかなか寝付けず、1・2・3・・・・数えているうちに、やはり疲れているのかいつの間にか意識はなくなった。

昭和40年8月2日（快晴）

3時20分に起床し荷物の再編成。食料は必要最低量に整理し、残りは恩田に下ろしてもらうことにする。恩田は多少良くなったがまだ全身がだるくて何もする気がしないと言い、朝食はスープだけしか口にはしなかった。

素晴らしい星空が段々に明るくなり、今日の好天が予想できる感じになってきた。

6時10分出発、荷物は（体感による測量だが）私が 11 貫、井口が 8.5 貫ぐらいか。7 時、主稜線に出たところで恩田は右へ峠の方へ、我々は荒川岳に向かって左へ。責任も荷物も重くなって肩に食い込んでくる。石油タンクの栓が緩んで、漏れた石油がキスリングに奇妙な模様を付けさらに体の周りに臭いをばら撒いてくれる。

前小河内8時10分、本日最初の中休止30分。

小河内岳（こごうちだけ　2802m）9時30分、一時間の休憩と昼食。北に塩見岳、蝙蝠岳が穏やかに立ち、それより北には昨日と変わらぬ眺め、そして南に目を向けると、小西俣をはさんで荒川岳の堂々たる姿、悪沢岳、中岳、前岳。青黒く晴れ上がった空の下には雲ひとつなく、暗緑色の荒川岳。我々の居る足元の土の色、ハイマツの色、まるで作ったような彩の世界、その中で食べるキューリの緑がまたひときわ鮮やかだ。（右写真）

10時30分出発、小河内岳からしばらく下ると、2500mの稜線には信じられないようなニッコウキスゲの咲き乱れるお花畑。11時20分、関西弁のパーティが必死になっ

てシャッターを押しまくっている。こちらも負けじと荷を下ろす。カラー・モノクロの両刀作戦で、11時35分までカメラタイム。

ここからはさしたる登り下りもなく、時々小さなピークを越す程度だが、稜線の西側は岩場のある絶壁で、東側はややなだらかな針葉樹林という状態が続く。大日影山（2573m）、板屋岳（2646m）と通り抜けて荒川岳の胸元に飛び込んだような高山裏露営地（2408m）。時刻は14時10分。当初の計画では今日は荒川小屋まで行く予定だったが、二名になってしまい荷物が重くなっているのでここでストップして、明日の荒川岳への登りに備えることにした。天幕場は、もう良い場所はほとんど取られており、おまけに幕営中に夕立に遭い、まったく不運。毎日午後から夕方には夕立があるものと思った方が良さそうだ。激しい雷雨の攻撃を受けながらテントの中で夕食。今日はザックの重さが増したせいか、肩に食い込んだ軋みがしばらく残っていた。

昭和40年8月3日（快晴）

起床3時30分、朝食を済ませて6時に出発。今回の縦走計画の中で、今日の荒川岳の登りは聖岳の登りとともにマークしていた難関である。意識していたせいかもしれないが、高山裏のテントサイトから東へ暫く進み中岳と前岳が頭上に構えるようになると、もうそれだけで圧倒されてしまい、荷が重く感じてくる。やがて登山靴ほどの大きさの石を敷き詰めたようなところをジグザグに登るようになると、塩見岳が背後に素晴らしい・・・のだが、そんなことをかまっていると余分に疲れてしまう。ただ歩くだけで大変なのに・・・・。ひたすら目の前の一段高い岩を無心に登ることばかりの繰り返し、そんな苦闘が三時間ほど続きにわかに前方の視界が開けて荒川前岳に飛び出した。9時20分、ここは 3068m、別名奥西河内岳（おくにしごうちだけ）とも言われる。眼下はるかに荒川小屋、さらにその先に大聖寺平、小赤石、赤石、長い山脈が南へ南へ連なっているのが見える。

3083．2mの荒川中岳を往復して前岳で昼食。荒川東岳（別名　悪沢岳）は3146m、南アルプスでは北岳、間岳に次ぐ高さ。ここからピストンする計画であったが、疲れ気味であまり意欲がわかないので中止し、その分の時間を食後の休養にあてることにした。昨晩の雨でぬれたテントを人気のない頂に広げて、その横に腰を下ろす。後ろには黄色い花をつけたイワベンケイ、その花に向かう一匹の蝶が・・・夢の国のような山頂。11時10分出発。今日はいい場所にテントを張れるように少し早めにテントサイトに着こうということになり、12：00過ぎ雲に首を突っ込んだ塩見岳に別れを告げ、見下ろす荒川小屋を目指して出発。とにかく驚嘆に値するチングルマの斜面。石ころの道を一時間半で荒川小屋。13時05分、今日はさすがにまだ幕営しているパーティは少ない。当初予定では、行けそうならば大聖寺平まで歩を進めることも考えていたが、他のパーティから得た情報では大聖寺平には水場がないということがわかったので、ここでよかった。天幕場使用料200円。テントを張り、シュラフなどを干しながら、見上げるような高さの荒川岳と正面に見える富士山を堪能。（右写真）

昭和40年8月4日（快晴）

起床4時、今日も好天、天気に関する限り幸運続きで文句なしというところ。朝食をとり、6時05分に出発。

大聖寺平6時35分。ここまではハイマツの中の快適な巻き道。何年前か忘れたが飛行機が墜落したというここには、まだ黒いジュラルミンの塊が散っていた。そんなこととはまったく無関係にハイマツの向こうに中央アルプスが広がって絶景。

赤石岳への登りは昨日の荒川岳への登りを思えば他愛なくさえ感じる。とは言っても、荒川小屋は2470m、標高差は650mで昨日とあまり変わらない。体が順応してきたせいだろうか。小赤石岳（3081m）8時25分、のんびり景色を楽しみながら9時40分迄休憩。

石を積み上げたような赤石岳は3120m、10時07分。聖岳が一段と近くなりその代わりに塩見岳が遠い景色になってしまった。昼食をしながら、いよいよ視野に入ってきた南部の山並みに目をやると、兎岳の左手に易老（いろう）岳らしいものが見える。見えてくればそう苦しい思いもせずに済む。もう前半戦は終わったことだし。

踏　み　跡　＜　My　mountains　＞

（右写真：小赤石から荒川岳を望む）

11時10分出発。赤石岳からひとしきり下ったところ、一面のハイマツの大広間の百間平はその名が示すごとく特筆すべきところである。百間というと180m、そう、幅が180m　奥行が300間か400間あるかもしれない。深緑色のハイマツを敷き詰めた御殿である。御殿の壁の一方には聖岳が、他の一方には荒川岳と赤石岳が紺碧の空にくっきりと姿を見せている。標高2800mの場所に信じられないような楽園だ。百間平の真ん中を一筋通る道を百間洞へ。

13時30分百間洞露営地に到着。百間洞とは、大井川の源流赤石沢の支流の沢の名で、大沢岳と百間平の間の窪みを水源としている。水源の場所に百間洞露営地があり、海抜　2500m弱の高さにある。天幕場使用料200円。やはり今日もかなり下ってしまって何だか損をしたような気がする。今日は疲れていない。体調はきわめて良好。第二の難関としている聖岳への登りは、いよいよ明日に迫った。

昭和40年8月5日（快晴）

起床2時30分、朝食はワカメとキャベツの味噌汁に佃煮でごはん。難関の無事突破を目指して、いつもより早く5時に出発。テントサイトにはキジ場がないため、百間洞山の家まで下って用を足した。5時40分行動開始、大沢山を巻いて登るルートをとり、6時25分南コルで稜線に合流。

中盛丸山（2807m）7時10分、南アルプスの3000m峰がすべて眺められる。この山の名、「中」は「大沢山と小兎岳の中間」の意味、「盛」は盛り上がり、「丸山」はその名の如し、つまり「大沢山と小兎岳の間の盛り上がった丸い山」ということで、実にわかりやすい山である。5分間の小休止で眺望を貪る。

小兎岳（2738m）8時、20分の休憩と軽食。

兎岳9時、2818m、高さこそ劣るが丸山方面から見ると聖岳に負けぬどころか、容姿は聖岳にそっくりである。

兎岳を下り、聖岳への登りに入る前に昼食をとり、最後の3000m峰へのスタミナをつける。10:00太陽を暑く感じ始める頃。赤石岳の山名の由来ともなった赤紫色の小石がゴロゴロする尾根を一時間半、聖岳（前聖）に到着、11時40分。3011m、日本で最南に座す3000m峰（＊）。聖岳からの眺めは楽しい。北を向くと、仙丈ケ岳、赤石岳、悪沢岳と南アルプスの三つの「カールを持つ3000m峰」が並んで見える。山肌に小雲の影を映した姿は、灼熱の太陽を忘れさせてくれる。頂上より東、奥聖岳方面を見れば、これもまた素晴らしい。奥聖岳に連なる稜線の向こうに、果てしなく雲海が広がり、彼方に富士が顔を出している景色は、雲上の楽園という形容がピッタリする。（左の写真：奥聖岳と富士山）

今まではっきりとは見えなかった最南端の山々もここからははっきりと読み取れる。光岳、加々森山まではっきりと確認できるが、目の前に赤石岳が大きく立ちはだかるので荒川岳は見えない。

奥聖岳をピストンして、標高2300mの聖平までストレートの下り。これで　3000mの高さとはお別れになる。ガラ場から、ハイマツ帯を通り潅木帯を抜けて針葉樹林の中の聖平まで700mの急降下。肉体的な感覚以上に植物の垂直分布で感じることができる。聖平県営小屋テントサイト　14時15分着。天幕場使用料は50円。

ここまで来れば、今回の縦走は七割がた終わったと言える。おまけに、ここでなら停滞すべき事態が起きたとしても、赤石渡を経て下山することができる。明日は光岳、明後日は下って柴沢小屋または大間部落、その翌日帰京という筋書き・・・。そこまでうまく行くだろうか？　夕食は野菜炒め、19時に就寝。

踏　み　跡　＜　My　mountains　＞

昭和40年8月6日（晴のち曇り・夜は嵐）

起床4時、晴れてはいるが雲が多い。いよいよ崩れる日が近づいているらしい。6時20分出発。

ハイマツの中の上河内岳（2803.4m）8時35分、やや早めのおやつを食べながら風景を楽しむ。二人のパーティが天気図を書いているので覗いてみたら、上空の雲が示すように天気はよくない。台風15号が来ている。今までつきについていた天気にすべてを任せっきりにしていたが、ついに今夜は雨の洗礼を受けることになりそうだ。光岳まで行かぬうちに降られる可能性が大きい。今日は茶臼か仁田池あたりで止めておくことに決定。9時出発、それにしても、雲がありながらもよい天気だ。

2549m峰を過ぎると稜線上に花畑が広がる。ここで休まなければ・・・と思い、再び30分の休憩。

天は正直だった。一時間もすると富士も聖も姿を消してしまい、陰気なガスの世界が到来した。

お花畑を過ぎて鞍部まで下り、東側の谷へ少し下ると茶臼小屋がある。11時10分、天幕場に幕営（使用料50円）。

ここまで来ると、「どこからどこへ下山するか」が判断材料になる。天候急変のことも加味して考えるなら、ここで一泊して明日下山という計画が妥当な気がするので、畑薙へ下ることが可能なここを宿泊地に選ぶことにした。

12時50分、幕営後に茶臼岳と仁田池をピストン。雲の動きは目に見えるスピードで、誰もいなくなった茶臼岳頂上は、昨日までの陽性の稜線とはまるで違ううら寂しさ。岩稜もわずかに湿気を感じてきたので急いで天幕に戻った。

（上写真：茶臼岳からの帰り道で）

14時帰着、早めに準備を始めてゆったり夕食を済ませ19時就寝。気象情報によれば、台風15号は山口市沖から日本海を北北東へ進んでいる。これから暴風雨になる見込みだと言う。いつ頃から降り出しただろうか、雨ばかりかポールを揺さぶるほどの風に天幕は踊り、二人で両端の二本のポールを押さえている頬を、はためく天幕が憎しとばかり打ち付けてくる。風に備えてがっちりと張ったとはいえ、こうまともに吹き付けられてはたまらない。夜の深まるのも忘れて台風15号と戦うことになった。テントの夜も、星の見えるロマンティックな夜ばかりではないということが身をもって感じられた夜。

昭和40年8月7日（晴）

5時起床、遅くまでポールを握っていたのでまだ寝不足。朝食は雑炊。天幕をたたんで茶臼小屋で少々休憩。

嵐の後とはいえ、あまりに回復が早すぎる。7時を過ぎると、もう空には青いものが出てきた。8時出発、下山開始。

下山ルートは水の音が聞ける上河内沢経由。茶臼小屋の北側の 2555m峰から南東に張り出す小尾根を下り、横窪沢の水辺に出る。9時40分、一週間見ることがなかった轟音を立てて流れる水に出会うともう休みたくなる。手を洗う、顔を洗う、水を飲む、そして昼食。透明な流れに手を入れ、顔をぬらすと、焼け付くような太陽に照らされながら歩いた日々のことが、次から次へと思い出される。一滴の水が欲しかった塩見からの下りも今は笑い話にさえできる。11時30分出発、横窪沢小屋から対岸の尾根に取り付きウソッコ沢の出合いからは上河内沢に沿って下る。途中で釣橋を渡った後の河原が気持ちよさそうだったので、また45分の休憩。大きな釜や渕にかかった吊り橋を渡って下っていくに従い、このコースは意外にも最後の最後に難関が待ち構えていた。

青薙山の稜線が見上げるような高さになる頃、道は右岸の腹を再び登り始める。ここまで来てもう大丈夫、と思ったところで150mの登り。誰もがこう思うのだろう、その名もヤレヤレ峠。峠に登ると、眼下に畑薙の湖が広がり、今度は長い吊り橋が湖面を横切っているのが見える。

畑薙大吊橋は全長200m、対岸の方が細く結びそうに見える。これを渡らないとシャバには戻れない、「シャバへの関門」のような感じである。中央部の上下

動の幅は1m近くあるように感じた。下を見ると、緑色の湖水が滑らかに光っているのが見えるが、それどころではない、怖い。（上写真：畑薙大吊橋）

吊り橋を渡り切ると、大井川東俣の二軒小屋に続くトラック道。まず最初に「文明の地に戻った」ことを実感する。畑薙湖の湖岸を走るトラック道を歩いて、15時10分終着駅、畑薙第一堰堤に到着。ここは海抜 945m、7月30日に新宿駅で見て以来8日ぶりにスカートをはいた女性を見た。露出した二本の足がやけに美しく見える。

静岡行の直通バスは、終車が今出たばかり。と言っても別にあせる気持ちはない。今日はこのあたりでもう一泊しようという腹積もりだから。バス停前の井川山岳会の警備隊に下山報告書を提出し、ついでに聞いてみると、井川本村のキャンプ場を教えてくれた。井川行のバスに乗り本村で下車。16時35分、市場のようなところで晩餐会の用意をして舟で対岸のキャンプ場へ。18時ちょうど、本日の宿泊地に辿り着いた。

「縦走完了記念晩餐会」と名付けた野郎二人だけの宴は、五目寿司、味噌汁、ビールで、オードブルはサラミソーセージにチーズとクラッカー。

五目寿司の素は、この日のために九日間担いできたもので、酢は井川で買い、寿司にあわせた飯の炊き方なども素人離れしていたことは言うまでもない。サラミはスライスにして皿に輪のように並べ、チーズは扇型にしてサラミの上へひとまわり小さな輪で、マッチ棒を削った楊枝を二本つけて・・・手の込んだ夕食だった。（右写真：最後の晩餐）

湖水をなでる涼風を素肌に受けながら、大無間山が夕闇に見えなくなるまで、食べ語り合った。しかし、ここまでよくやった。恩田と別れてからしばらくは随分苦しかったが、ここまで来て見ると、それも楽しい思い出である。明日は歩く必要なし。夜は東京、布団で寝られるぞ。21時半就寝。

昭和40年8月8日（晴）

起床4時30分、こういう時刻に起床する習慣がついてしまった。朝食は残ったご飯で作った雑炊。

7時50分の舟で井川本村に戻り、8時16分発の静岡行のバスに乗った。堰堤を渡り、富士見峠を越え安倍川の流れに沿って走ること2時間45分、静岡駅に着いたのは11時頃。（バス290円）

駅近くの食堂に入ると、どの客もいっせいに我々に注目する。そうだろう、汚い格好だから。カツ丼を食べたように記憶している。

12時03分発急行雲仙、九州方面からの列車で、女性グループや家族連れなどでいっぱい。ここで我々は未だかつて味わったことのない空気を感じた。中央線や上越線では、たとえ登山でなくとも外見、風情の美醜はあまり問題にならないのだが、音に聞きし東海道線ゆえそうはいかない。我々をとりまく美しく装った連中は、まるでばい菌でも見るような（本当に汗臭く汚いのだから仕方がない？）目つきで見る。小さくなって静かにしているのも癪だから、場にそぐわぬ一万尺の稜線の思い出話をでかでかと話し合うことにした。これを以って反省会とすべく。快適な東海道線の旅、静岡から東京まで二時間半。東京駅に14時50分に到着。まだ陽の高いうちに九日ぶりの我が家の畳の上に立つことができた。

大きなキスリングを背負って、3000m峰が連続する稜線を一週間以上歩くという大きな旅を終えて、新しい経験や味わったことのない苦悩も味わい、生意気なようだが、「登山とは・・・？」が少しばかりわかってきたような気がした。

以上

＊註：聖岳の高さ

一般に聖岳と呼ぶ場合は、前聖岳（西峰）を指す。

1965年8月時点のデータでは、前聖岳（3011m）、奥聖岳（2978m）となっているが、

2004年5月の日本山名事典及び国土地林の地形図では、前聖岳（3013m）、奥聖岳（2982m）となっている。

（修正・更新：2023年10月）